

risei + trip

vol.
01

特集

ススメ! 現場実習
(理学療法学科篇)





(写真左上)患者さんのリハビリをサポート。穏やかな会話をしながらも、目は真剣(左中)指導担当の佐藤先生に実習のフィードバックを受ける(左下)ご両親、妹と、自宅のソファで



photographs by Naohiro Kurashina

特集

ススメ！ 現場実習

理学療法学科篇



JR 札幌駅から徒歩5分の斗南病院。
この冬、雪の降り積もる北の街で、
理学療法学科4年生の中村風香さんが
学生生活最後の臨床実習に挑みました。

毎年、数多くのプロを輩出している履正社医療スポーツ専門学校の理学療法学科では、冬になると、4年生が長期間の「旅」に出る。

これまでで学校で学んできた知識や技術を、実際に医療・福祉機関で働くことで、「生きた知恵」に変える——学業の集大成ともいえる現場での臨床実習である。

学生は全国に広がる実習先の中から、希望の先行先を選ぶ。一度訪れたかった街、尊敬する先生の土地、選択肢は色々あるけども、中村風香さんのように、「生まれ育った地元」で長期の実習生活を送る学生も、毎年多い。

中村さんは2017年の11月、現在一人暮らしをしている大阪から、故郷の札幌に理学療法士の卵として「凱旋」することになった。

慣れ親しんだ実家で、毎朝お弁当をつくってくれる母。車で息抜きに連れて行ってくれる父。同じ子ども部屋で休日過ごす妹——実習中はハードな毎日が続くことになるが、家族のあたたかいサポートはやっぱり心強い。

指導担当は、卒業生。

実習先は、大都市・札幌のご真ん中、北海道庁の隣にある斗南病院だ。高度の先進医療を担う都市型急性期病院で、赤レンガの立派な外観が特徴的。

平日の朝、起床すると窓の外は真っ白だ。中村さんは家から地下鉄とバスを乗り継いで片道40分、毎朝7時50分には病院に行く。8時半からの朝礼、申し送りの後は正午までの午前診療、そして1時間のお昼休憩をはさんで、13時から17時まで午後診療。指導担当の先生からフィードバックをいただいて一日を

振り返り、18時頃に実習終了だ。帰宅後は食事と入浴をすませ仮眠をとり、その日のレポートを書く。それを二カ月、繰り返す。

中村さんの指導担当を務めるのは、理学療法士歴8年の佐藤啓介先生。履正社医療スポーツ専門学校の卒業生でもある。佐藤先生の指示のもと、中村さんは先輩たちが患者さんを診療する様子を見学し、時にはそれをサポートする。他にも、会議に参加したり、実際に自分で患者さんを2名担当したりするなどし、理学療法士の仕事を総合的に体験するのだ。

中村さんが実習で痛感するのは、「コミュニケーションの大切さだ」という。手術直後の方、余命数カ月の方、心臓のリハビリが必要な方、集中治療室に入っている方——学校の授業で学ぶのは一般的な治療の流れだが、実習で目にするのは、「この患者さんにはどういった治療が必要なのか」という個別の状況だ。自分ならどう対応するか……現場に出たときの自分を、日々想像する。

将来、野球の現場で。

野球が大好きな中村さんは高校時代に野球部のマネージャーを経験したことがきっかけで、野球に携わる仕事がしたいと、故郷を飛び出し、履正社医療スポーツ専門学校のスポーツ学科野球コースに進学した。履正社なら、野球の現場で必要とされる様々な資格が取れるし、内部進学すれば格安で医療の国家資格も取れる。将来は、野球の公式記録員として活動を続けながら、選手をサポートする理学療法士になることが目標だ。

いつも応援してくれる家族。今までお世話になってきたすべての人に恩返しをしたい。その気持ちがこの冬、実習に挑む中村さんの原動力になっている。